

はじめに

2014年に1回目の札幌国際芸術祭(略称:SIAF)が開催されたことを契機に、 翌年からSIAFラボの活動がスタートしました。

2年目の2016年度は、前年度の活動をベースに、「未来のための、札幌を拓く」を テーマとして行った様々なプログラムやそこでの出会いの中から、未知の「札幌」 を発見し、共有、発信する活動をアーティストや研究者、そして市民の皆さんととも に展開してきました。

具体的には、3つのメインプログラム「SIAFラボ編集局-サッポロを編集する-」、「Bent Icicle Project-Tulala-ツララボ」、「特別プログラム《一石を投じる》のこれから-パブリックアートについて学ぶ-」と連携企画を実施しました。

また、そうしたプログラムを通じて、SIAF2017のテーマである「芸術祭ってなんだ?」 (或いは「アートってなんだ?」)を、SIAFラボの活動に参加した一人ひとりが考えることは、最終的に、私たちが暮らす札幌、北海道を再認識し、再発掘していく事にも繋がると考えました。

こうしたSIAFラボの活動が、参加者の主体的、自発的な取り組みを生み出す場として、また次回のSIAFに向けて個々の活動を刺激し育む環境として機能していくことを期待しています。

2年目の活動をご紹介いたします。

目次

- 01 はじめに
- 02 SIAFラボとは?
- 03 SIAFラボ編集局 -サッポロを編集する-
- 05 Bent Icicle Project Tulala ツララボ
- 07 メディアってなんだ?
- 09 SIAFラボ編集局を振り返って
- 11 つらつらつららトーク
- 13 特別プログラム《一石を投じる》のこれからーパブリックアートについて学ぶー
- 17 連携企画
- 20 SIAFラボイベント年表
- 21 おわりに

SIAFラボとは?

SIAFとは、札幌国際芸術祭(Sapporo International Art Festival)の略称で「サイアフ」と 読みます。3年に1度、札幌市で行われる国際的なアートフェスティバルで、次回は2017年8月6日(日)~10月1日(日)の57日間にわたり開催します。

この札幌国際芸術祭の略称を冠したSIAFラボとは、「未来のための、札幌を拓く」をテーマに、さまざまなプログラムを通じて、芸術文化活動の担い手となる多彩な人々(アーティスト、キュレーター、研究者、コーディネーター、市民活動団体、ボランティアスタッフなど)を繋ぎ、共に考え、学び合う場として機能します。また、札幌市内において主体的、自発的な活動を行う人々の拠り所となり、札幌らしい芸術文化活動が育まれるきっかけをつくります。SIAFラボが実施するプログラムは、子どもからお年寄りまで誰でも参加することができます。SIAFラボの自主事業だけではなく、市民主体の活動や既存の芸術文化関係者との連携によってイベント等を実施しています。多くの市民がSIAFをはじめとする芸術文化に関心を持ち、理解を深めるための「出会い」と「発見」に満ちた場となることを目指します。





SIAFラウンジ

札幌市資料館1階にあるSIAFラウンジは、過去のSIAFの記録物や、関連書籍が閲覧できるライブラリーを兼ね備えたインフォメーションセンターとして、芸術祭にまつわる情報の他、芸術文化に関する様々な情報を共有、発信するスペースです。そして、SIAFをはじめ芸術文化に関心のある人々が集う交流の場として機能していくことを目指しています。カフェも併設され、飲食や休憩スペースとしてご利用いただけます。



Photo: Erika Kusum

SIAFプロジェクトルーム

札幌市資料館の2階にあるSIAFプロジェクトルームは、SIAFラボで行われるワークショップやレクチャーなど、ものづくりや学びの場として機能していくことはもちろん、展示空間としても活用されます。 ※プログラム実施時のみ開室しています。



SIAFラボ編集局-サッポロを編集する-

私たちが暮らす札幌とは、どんなところなのでしょうか?

SIAFラボ編集局では、暮らしにまつわる「人・もの・こと」を題材として、この土地ならではの情報を集め、編集、発信していくプロジェクトです。気になる活動をしているあの人のこと、知る人ぞ知る名品・名所、なぜか根付いている習慣ごとなど、札幌の文化を彩る要素をさまざまな角度から分析し、編集していきます。また、情報を伝えるために、新しいメディア(情報発信媒体)の開発にもチャレンジしていきます。

2015年には、SIAF2017へ向けたプロジェクトであるSIAFラボの活動が始まり、その中のプログラムのひとつとして、各分野の専門家を招き、札幌らしさとは何かを考えていくレクチャープログラム「SAPPORO STUDY」が行われました。2016年、2年目を迎えたSIAFラボは、これらの取り組みの流れを汲んだ新たなプロジェクト「SIAFラボ編集局」を発足し、年間を通じて参加者が調査員として情報を集め、編集し、発信することを目的に活動をスタートしました。

SIAFラボ編集局は、編集の方針や情報の発信媒体について検討していく「編集会議」とさまざまななゲストを通して知識を深める「ラウンジトーク」の2つのプログラムで構成され、2016年5月に第1回目を開催し、以降月1回の頻度で編集会議、隔月に1回ラウンジトークを行いました。8月には、調査するテーマに「札幌の色」を設定し、「札幌の景観色70色*」を手掛かりに参加者毎に興味を持った色について調べ始め、お互いの調査の進捗について発表し合うことが定例となりました。年度の後半は、収集した情報をどのように発信していくかについて話し合い、翌年2月上旬にそれぞれの情報を映像化し、「デジタル壁マガジン」として札幌市資料館の壁面に投影しました。

* 札幌における人工物や自然物の色彩変化や、風土のイメージ、色彩感覚アンケートなどを多岐にわたって色彩分析し、札幌の景観色として70色を定めたものです。一定規模以上の建築物の新増改築や大規模な修繕、外観の過半の色彩変更などを行う場合、基準となる色彩を具体的に示すためのガイドラインとして使用されています。

ラウンジトーク

SIAF2017をはじめとする特徴的な芸術文化活動を担う人々をゲストに迎え、それぞれが専門とするジャンルや特徴、活動原点、歴史、変遷、成り立ちについてお話を聞き、参加者と共有し、意見交換を通じて、学びあうプログラムです。



編集会議

参加者自らが集めた情報を元に、編集方針や内容、 その取り扱いや、活用する媒体について検討して いくミーティングです。また、情報の発信媒体として 瓦版を編集・作成し、半年に一度の発行をするほか、 新しい媒体作りにも挑戦します。



2016年度活動一覧

企画ディレクター: 漆 崇博(SIAF ラボ マネージャー) ラウンジトーク コーディネーター: 詫間 のり子(SIAF ラボ スタッフ) 編集会議 コーディネーター: 杉本 直貴(SIAF ラボ スタッフ)

2016

第1回 編集会議「-サッポロを編集する-」

5月21日(土) 15:00 | 会場:SIAFプロジェクトルーム ゲスト:佐藤 直樹 (アートディレクター、SIAF2017パンドメンバー)、 坂口 千秋 (コーディネーター、SIAF2017パンドメンバー)

ラウンジトーク vol.1 「メディアってなんだ?」

6月25日(土) 15:00 | 会場: SIAF ラウンジ ゲスト: 久保田 晃弘 (多摩美術大学教授、アーティスト)

メディアアーティストの久保田晃弘さんをお招きし、メディアアートの歴史や系譜などを辿りながら最先端のメディアアートの事情に触れ、そもそも「メディア」とは何か?について学び、考える機会になりました。

第2回 編集会議 「一〇〇を編集する一|

6月26日(日) 15:00 | 会場: SIAF プロジェクトルーム

ラウンジトーク vol.2 「風景画ってなんだ?」

7月18日(月・祝) 15:00 | 会場: SIAF ラウンジ ゲスト: ヤマガミユキヒロ (アーティスト)、大友 真志 (写真家)

SIAFプロジェクトルームで開催中の展覧会「Air Scapes」(P17)の出展アーティストであるヤマガミユキヒロさん、北海道出身の写真家・大友真志さんをお招きし、さっぽろの風景、その捉え方やお互いがどのように風景をみて、表現しているかを伺う機会になりました。

第3回 編集会議 「-札幌にはなにがある?-|

7月23日(土) 15:00 | 会場: SIAFプロジェクトルーム

第4回 編集会議「-どのように発信する?-|

8月20日(土) 15:00 | 会場: SIAF プロジェクトルーム

ラウンジトーク vol.3「リアリティってなんだ?」

9月17日(土) 15:00 | 会場: SIAF ラウンジ

ゲスト:藤木 淳(メディアアーティスト、科学技術振興機構さきがけ研究者)、 小町谷 圭(メディアアーティスト、札幌大谷大学講師)

第10回文化庁メディア芸術祭アート部門優秀賞を受賞されているメディアアーティスト藤木淳さん、SIAFラボ企画メンバーである小町谷圭さんをお招きして、作品や活動の紹介を通じて追求しているリアリティについて、また人それぞれの認識の違い等を話していただきました。

第5回 編集会議 [-情報を編集しよう-|

9月24日(土) 15:00 | 会場: SIAFプロジェクトルーム

SIAFラボ プロジェクトミーティング

10月1日(土) 15:00 | 会場:SIAF ラウンジ ゲスト:工藤 "ワビ"良平 (アートディレクター、グラフィックデザイナー)、 佐藤 直樹 (アートディレクター、SIAF2017パンドメンバー)

第6回 編集会議 「-発信方法を考える-|

11月19日(土) 15:00 | 会場: SIAF プロジェクトルーム

第7回 編集会議 「-続・発信方法を考える-」

12月10日(土) 15:00 | 会場: SIAF プロジェクトルーム

2017

第8回 編集会議「-記事をつくろう-|

1月28日(土) 15:00 | 会場: SIAFプロジェクトルーム

ラウンジトーク vol.4「ハルニレと札幌の町 |

2月18日(土) 15:00 | 会場: SIAF ラウンジ

ゲスト:笠 康三郎 (ランドスケープアーキテクト、札幌ハルニレプロジェクト代表)

第9回 編集会議「-壁新聞をつくろう-

2月25日(土) 15:00 | 会場: SIAFプロジェクトルーム

2016年度 SIAFラボ活動報告会

3月25日(土) 15:00 | 会場: SIAF ラウンジ ゲスト: 久保田 晃弘 (多摩美術大学教授、アーティスト)



1. 第1回 編集会議「-サッポロを編集する-」 2. ラウンジトーク vol.2 「風景画ってなんだ?」 3. ラウンジトーク vol.3 「リアリティってなんだ?」 4. 第5回 編集会議 「-情報を編集しよう-」 5. 第8回 編集会議 「-記事をつくろう-」 6. ラウンジトーク vol.4 「ハルニレと札幌の町」

Bent Icicle Project-Tulala-ツララボ

2015年度にSIAFラボで始動した「Bent Icicle Project-Tulala」。アーティストや研究者がプロジェクトの中心メンバーとなって、「つらら」を題材・媒介としたアイデアを持ち寄り、ワークショップやイベントを通して雪国ならではの暮らしの可能性を検証・再考するプロジェクトです。 同時に、参加者の皆さんが、メディアアートや現代アートについて学びながら、アートプロジェクトの運営に関わることで、そこから新たな芸術文化活動の担い手や、札幌独自の活動の創出を目指しています。

2016年度は夏に中間発表として「さっぽろ垂氷まつり in summer」、冬に1年間の成果発表として「さっぽろ垂氷まつり2017」を行いました。

さっぽろ垂氷まつり in summer

2016年8月27日(土)・28日(日) 10:00

展示

ツララボ HP はじめました! 会場: SIAF ラウンジ

HPを立ち上げ、ツララボの活動の記録の公開をスタートしました。当日会場に、自由に閲覧できるディスプレイコーナーを設けました。

Mikoshi Go! 会場: SIAFラウンジ

「まつり」と銘打つからにはやっぱり「おみこし」。人間よりも大きいつららをつくって、おみこしのように 運びたい! そして余すところなく食べてみたい! 実現に向けて、計画と構想の一部をご紹介しました。

人工氷柱製造装置 2016夏 会場: SIAFラウンジ

商業用の冷凍庫を改造して、自然界には存在しない形のつららを製造するマシンを制作・展示しました。

ワークショップ つららアクセサリーをつくろう!

8月27日(土) ①10:00 ②13:00/8月28日(日) ①10:00 ②13:00 ③15:00 | 会場: SIAF ラウンジ

本物のつららの形状をスキャンし3Dプリンタで出力したパーツを使って、自分だけのオリジナルアクセサリーをつくるワークショップを行いました。

トーク **つららと住まう北の建築** 8月27日(土) 15:00 | 会場: SIAF プロジェクトルーム

ゲスト: 赤坂 真一郎(建築家)、斉藤 雅也(建築環境学者)、石田 勝也(VJ、札幌市立大学講師)

冬期においての北海道・札幌の暮らしと建築・建築環境・デザインとの関係性について、様々な視点から検証していくことを目的として、トークを開催。各分野に専門的な知識を持つゲストをお招きし、それぞれの観点からの意見を伺いました。

活動

ミーティング:月1回

勉強会・イベント等: 不定期開催

プロジェクトメンバー:

小町谷 圭 (メディアアーティスト、札幌大谷大学講師)、

石田 勝也 (VJ、札幌市立大学講師)、

船戸 大輔 (エンジニア)、

漆 崇博 (SIAFラボマネージャー)

コーディネーター:

冨田 哲司 (現代美術家)、

川成 由 (SIAFラボ スタッフ)



さっぽろ垂氷まつり2017 プレイベント

2017年1月29日(日)-2月5日(日)

つらら建築ハッカソン

- ・説明会・レクチャー…1月29日(日) 15:00 | 会場: SIAF ラウンジ
- ・制作…1月31日(火)-2月5日(日) 終日 | 会場: SIAFプロジェクトルーム、 裏庭特設会場
- ・講評会·表彰式…2月5日(日) 11:00 | 会場: SIAFラウンジ
- ·作品展示···2月6日(月)-12日(日) 10:00 | 会場: 裏庭特設会場
- ・アーカイブ展示…2月6日(月)-12日(日) 10:00 | 会場: SIAFラウンジ

裏庭特設会場に設置したつららをつくる為の「垂氷小屋」の周りに「つららが美しく出来る建築とは?」をテーマに、つららのできばえを競うハッカソンを行いました。ポスト型や屋根の傾斜にこだわりをみせるなど、参加者がつくった独自のミニチュアの建築(家)から、つららの特性について考えました。



さっぽろ垂氷まつり 2017

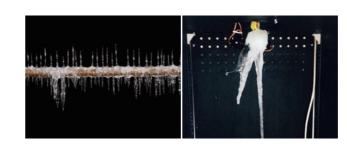
2017年2月6日(月)-2月12日(日) 10:00

展示

こんなの見たことない!?不思議な形をしたつららの展示

会場: 前庭特設会場、SIAFラウンジ

360度に伸びるつらら・冷凍庫を改造してつくった人工氷柱製造装置など、さまざまな形・タイプのつららを制作・展示しました。



販売 大人気!つららアクセサリー

会場:SIAFラウンジ

ワークショップとして人気を集めてきたつららアクセサリーを、完成品としてパッケージ化し販売しました。

展示 SIAFラボ編集局 デジタル壁マガジン

2月11日(土·祝)-12日(日) 17:00 | 会場:前庭特設会場

SIAFラボ編集局「編集会議」で調査・作成中の記事の一部を、プロジェクターを使用し資料館の壁面へ投影しました。

展示・ワークショップ

さっぽろ今⇔昔 冬の楽しみ方のルーツを探る

○さっぽろ冬の記憶 展

会場:SIAFプロジェクトルーム

垂氷まつりのアイディアのルーツでもある「さっぽろ雪まつり」の草創期や、 今はあまり目にしなくなってしまった札幌の冬の情景をパネル展示、映像 上映で紹介しました。

○写真リサーチワークショップ

2月11日(土・祝) 13:00 | 会場: SIAFプロジェクトルーム、市内各所

過去に札幌で撮影された写真の場所をリサーチし、プリントアウトした写真と風景を重ね合わせながら同じアングルで写真を撮影しました。





フォンタナからメディアアートを考える

ルーチョ・フォンタナの「空間概念」という連作があります。カンバスを切り裂いて、穴を空けたもの。これはまさに、メディアアート作品だといえるでしょう。では、メディアとはなにか。美術史としての意味はさておき、まずは「モノをつくったり表現したりするとき、そこには必ずメディアがある」ことを意識することが、メディアを考えることの第一歩です。メディアとは「~と~の間にあるもの」、図と地でいうと「地」、普段は隠れているものです。でも、隠れているものだからこそ、考え方や理解のしかたに大きな影響を与えます。さらにそれがひとたび露になれば、固定観念や既成概念を超えて、もっと大きなものを見せてくれるのではないか。メディアアートは、その可能性を探求しています。フォンタナは絵画のキャンバスという伝統的なメディアでそのことを実践したけれど、コンピュータ以降のデジタルメディアで探求するのが、メディアアートです。20世紀は、メディアと美術が結びついた時代でした。そこで起きた議論こそが「~ってなんだ?」を考えるツールになると思います。

「ニューメディアアート| に歴史あり

1980年代、新しいメディアによる美術の可能性を開いたのが、日本とヨーロッパでした。初期の「ニューメディアアート」の一例が、当時社会に初めて登場した、ウェブブラウザを使ったネットアート作品です。

通常はわかりやすいページをデザインしようとしますが、逆にそこに 意味のない文字の羅列を大量に生成し、クリックするといろいろなエ ラーやグリッチが起こります。

インターネットが登場したとき、多くの人はそのコンテンツに興味や 関心を持ちました。でも、この作品は「ブラウザってなんだ?」という ことを自問することで、ブラウザそのものを、そしてその裏にコード や記号、数があるということを表現したのです。

デカルトは『方法序説』で、中世の混沌とした神話や迷信の世界を 先に進めようとしました。彼の出発点は「すべてを疑え」でした。身近 なものを、絶対に疑いようのない真実にたどり着くまで疑ったのです。 この行為は、現代でも重要です。あたりまえと思われていることだか らこそ、疑ってみる。だから、メディアアートの出発点は「メディアを 疑え」なのです。

マクルーハンの「メディア論」と「アート論」

メディアを考えるのに欠かせないのが、マーシャル・マクルーハンです。 1960年代からメディアに関する研究を行い、今でも再読すべきメディア論を展開しました。写真・映画・ラジオ・テレビ・インターネットが次々と登場した、めまぐるしい変化の時代に「メディアとはなにか」を考え続けました。とりわけ有名なのは「メディアは身体を拡張する、電子メディアは脳を拡張する」というフレーズです。

車は足の拡張で、望遠鏡は目の拡張といえます。ではコンピュータ

は何を拡張するのか。さらに彼は「古いメディアは新しいメディアのコンテンツとなる」とも言っています。テレビで映画が放映されたことを考えるといいでしょう。

アートの役割についても語っています。「環境の内部にいるものは、その環境を知覚できない」「芸術家は新しい環境と対峙し、その本質を見抜く」「芸術作品は新しい環境を目に見えるようにする」など、彼も普段は隠れているものを世に提示することこそがアートであるといっています。

メディアを考える法則「テトラッド」

マクルーハンは、メディアの本質を見抜くための「テトラッド」という 理論を打ち立てました。一つのメディアを「強化」「衰退」「回復」「反転」 という4つの視点で考えていくことで、メディアの隠れた可能性を発見できます。これは、「いま自分が気づいていないことはなにか、ということに気づく」ためのツールでもあります。ぜひ芸術祭でもやってみましょう。芸術祭を行うことで、何が強化されて、何が衰退するのか、何が回復して、何が反転するのか。「芸術祭ってなんだ?」を考えるうえでは有効な方法だと思います。

ものごとの本質はその黎明期に現れます。初期の実験映像や電子音楽を調べると、稚拙だったとしても、そこで何をやろうとしていたかが明確に読み取れます。芸術祭も、その誕生から調べてみることで、見えてくることがたくさんあると思います。

締めくくりのアート語録 — 2016年度 SIAF ラボ活動報告会

――「大切なのは、芸術祭と鑑賞者の関係性である」

鑑賞者の数だけ、芸術祭がある。参加アーティストが芸術祭全体を 見ているわけではない。鑑賞者が意味を付加することで、作品は完成する。さまざまな見方が出たとしたら、芸術祭は成功したといえる のではないか。

――「札幌らしさは、隠していても出てくるもの」

札幌らしさとは、まちの個性。それを知るためには、内なる小さな声に耳を澄ませて、正直になることだ。それは、自分たちでつくり評価するものではなく、自然と出てしまうもので、最終的には外の人によって評価される。

――「常に、自らを批判しながら考え続けること」

自画自賛して満足してしまうのは怖いことである。もっと他にできたことはないかと問い続け、探求していくことが大事。欲を失わず、自らを批判的に見つめながら成長させていこう。

「SIAFラボ編集局 - サッポロを編集する- | 総括

SIAFラボ編集局を振り返って

漆 崇博 (SIAFラボマネージャー)

QR1: SAPPORO STUDY







SIAFラボ編集局はこうして始まった

2016年度から始まったSIAFラボ編集局は、遡ること3年前の札幌国際芸術祭(以降:SIAF)2014において、札幌市資料館を拠点として実施した「SIAF編集局」という活動に端を発する。

この「SIAF編集局」は、1回目のSIAF2014を専門的視点ではなく、ボランティア等で関わる方々のそれぞれの視点で分析し発信することで、SIAFをより身近に感じてもらい関心を高めていくことを目的にスタートした。そこには、芸術祭をいわゆる専門的な文脈から導き出した批評や解説から読み解く価値の提示は存在せず、逆に素人目線だからこその発見や楽しみ方といった情報が溢れていた。また、公式の情報発信とは一線を画してスタートした編集局には、日々情報提供者が訪れ、そこでのコミュニケーションの中からさまざまな媒体(サカナ通信、サカナ通信ブログ、サカナ通信 diary、サカナ通信道新版、アートカフェin 資料館など)が生まれていった。

同時に、作品やプログラムに関する疑問や提案、感想も多く寄せられ、「SIAF編集局」の活動の中だけで見ても、市民の芸術祭への関心の高さや参加する意欲を実感する機会となった。また、札幌、北海道の歴史や都市の変遷、地域の習慣や逸話、食に関する情報など、SIAFとは直接関係のない情報も多く寄せられ、この活動を通じて「札幌とはどんな場所か?」を参加するそれぞれが考える契機になったとも考えている。その事実を背景に、2015年度から始まったSIAFラボの活動では、1年間を通じて「札幌」を考える「SAPPORO STUDY(※QR1)」がスタートする。各回に未知なる札幌を知るために特定のテーマ(建物、市電、冬など)を設け、その筋の専門家と参加者がともに学びあうプログラムとして実施した。つまり、先に紹介した「SIAF編集局」と「SAPPORO STUDY」を合わせて現在の「SIAFラボ編集局」につながっていくのである。

札幌らしさって何だ?

さて、「SIAFラボ編集局」の1年間の活動を振り返ってみたい。 前提としては、編集長を置かず、参加者がそれぞれ調査員となり、 リサーチから編集、そして発信する媒体を制作する。そのプロセスを編集会議で他の参加者と共有し、意見交換を行う。特定の対象者への取材は、場合によってラウンジトークとして公開する。最終的にまとめた情報は、個々に制作、発信する媒体以外に、共通のアーカイブとしてSIAFラボのWEBサイトに掲載する。以上のことを前提に「SIAFラボ編集局」はスタートする。

最初に取り組んだことは、「札幌には何があるのか?」を参加者と 共に探ることであった。それは、地域の特徴は何か?他にはない 特別なものは存在するのか?といういわゆる「らしさ」を発見する ことであった。 編集会議の1回目では、SIAF2014でのSIAF編集局で集めた情報や、その後のSAPPORO STUDYで学んだ知識の共有を含め、参加者との意見交換は大いに盛り上がった一方で、新たな発見、未知との出会いにつながる要素となる特異なテーマを導くには十分な時間を費やすことができなかった。

そこで、2回目の編集会議では、参加者それぞれが取り扱うテーマの前提になる考え方について話し合いを行った。つまり題材は何であれ、どのような視点や切り口で掘り下げて行くか、掘り下げた先に未知なる発見につながる可能性があるか、そこを踏まえて最終的に「何をメディアとして捉えるか(※P7参照:ラウンジトーク久保田晃弘氏のアドバイスより)」がその後の編集の鍵となることを共有した。誰もが知っている題材であったとしても、その奥に潜む未知な部分が札幌を再認識、再発見することにつながる可能性も否定できないのだ。

札幌の何を編集する?

そうこうしている中で、3回目の編集会議に突如浮上したキーワードがある。それが「札幌景観色」だ。どうやら札幌市内の特定のエリアに建てられる建築物や構造物に対して適応される色らしい。しかも70色のバリエーションがあり、それぞれに札幌にちなんだ名称が付けられていて、その理由となる解説も存在するとのこと。参加者のほとんどがその存在に興味を持ち調査が始まった。何より興味をそそられたのが、色に付けられた名称とその解説である。

ネーミングと色との相性に疑問はあるものの、解説はちょっとした 豆知識の要素もあり、歴史的に重要な物事が網羅されており、制 作者の苦労もうかがえる。そんな哀愁すら漂う「札幌景観色」に 散りばめられたキーワード(色の名称)たちを編集のトレーニング として、そして札幌を知るひとつの入り口として題材にしてみよう ということになった。そしてリサーチが始まるのである。

疑問の先に新たな発見がある

「札幌景観色」を入り口に始まった各参加者のリサーチは、決して 画一的な視点ではなかった。

例えば、「開拓使」と名付けられた色に興味を抱いた調査員は、 色と名称の関係性について理由を調査していくうちに、そこに紐 づく解説とは別に独自の解釈でストーリーを導き、知る人ぞ知る 「お地蔵さん」の存在にたどり着くという新たな発見をもたらし た(※QR2)。また、「オーロラ」に注目した調査員は、そもそものネー ミングに疑問を抱き、中心街でもっとも近い色として「テレビ塔」 の色の変遷を明らかにしていく中で、かつてあった広告塔の存在 にたどり着く(※QR2)。疑問の先に新たな発見があったのだ。

また調査の手法もさまざまである。「札幌玉葱」と名付けられた色を調査している調査員は、現在認定されている札幌黄のみならず札幌伝統野菜(札幌大球など)の存在に注目し、実際に取り扱いのある店舗に訪問し食レポを展開している(※QR2)。「楡」を調査した調査員は、札幌における楡(ハルニレ)の存在を、ありとあらゆる資料をもとに独自の解釈を含めながら、開拓期の札幌の発展とそこに潜む秘話について明らかにした(※QR2)。

こうした調査員の探究心に支えられ、「何をメディアとして捉えるか」 の意味を意識することでの広がりやバリエーションが実に多様で あることを実感していくこととなった。

今後の展望

このように、調査員それぞれが題材を見出し、掘り下げ、編集を進めていく中で、ひとつの課題があった。それは、各自で制作する情報発信の媒体をどうするかということであった。前提はどうあれ、せっかく調査し編集したものを単にWEBサイトにアーカイブしていくだけではもったいない。とはいえ、各々に独自の媒体を制作するには、あまりにもコストと時間がかかりすぎる。そこで開発したのが「デジタル壁マガジン」だ。

手書きの壁新聞では、設置する場所にしても、情報量的にも制約が多すぎる。それならいっそのことデジタル映像化(アニメーション化)し、文字通り壁があればどこでも投影できる媒体をつくってしまおうということである。

そうした発想から、これまでの集大成として2017年の2月に開催した「さっぽろ垂氷まつり2017」の企画の中で、SIAFラボ編集局による「デジタル壁マガジン」が札幌市資料館の壁面に投影された。無論、実験の域を超えないレベルでの試作物としてではあるが、今後の展開に多くの可能性と課題を抱えた媒体の誕生であった。それが、「SIAFラボ編集局」が今後も継続していくことを示唆していたことは言うまでもない。

SIAF ラボの取り組みは、専門家による最先端且つ高度な研究を行う場ではなく、活動に参加する一人一人が、アート(アーティスト)の視点に触れ、自ら考え、自発的に物事を試し、共有、発信する場である。編集局の活動は、そうした価値を探求する場として2017年度も引き続き活動を展開していく。専門的な知識も、編集経験もほとんどないメンバーによる、小さな発見と飽くなき探究心が、札幌を拓く一助になることを信じて。



「Bent Icicle Project - Tulala - ツララボ」 関連トーク

つらつらつららトーク

小町谷 圭×石田 勝也×船戸 大輔×冨田 哲司



ツララボ WEB

Bent Icicle Project - Tulalaの誕生

小町谷: 札幌国際芸術祭は3年に1度の打ち上げ花火みたいなものだと思うんです。別の場所からアーティストが来て、札幌に新しい視点を提供してくれますが、ただ「面白かったね」で終わらせずに年間を通して札幌で継続的に考えていけるような場をつくろうというのが、SIAFラボの始まりです。活動が始まって半年、冬を迎える頃、「Bent Icicle Project – Tulala (愛称: ツララボ)」の構想が出てきました。

石田:最初に「人工つららをつくって、曲げたい」と言い出したのは、 小町谷さんです。

冨田:面白いですよね。その発想は札幌人からは、なかなか出ない。北国出身じゃない小町谷さんだからっていうのはある。

小町谷: SIAF2014で、雪の博士といわれる中谷宇吉郎の雪の結晶の写真と、その娘であり霧の彫刻家として知られる中谷芙二子の作品が出展されました。中谷博士は、雪氷学の基礎研究を重ねて、北海道の近代的生活に貢献した人。芙二子さんは、テクノロジーを使った芸術を日本にいち早く紹介してきた人。この親子の作品が展示されたことに、メディア都市・札幌で芸術祭を開催する意義を感じました。札幌市資料館を拠点に活動するSIAFラボで何かできないかと考えたとき、中谷博士にとっての雪のように札幌を眺められるものとして「つらら」に行き着きました。

アートとサイエンスとテクノロジーの関係性

冨田: いろいろな人に参加してもらうというのが SIAF ラボの在り方。でも、コミュニティとアートやサイエンスって、対極にあると考えられがちですよね。

小町谷: 科学は、超細分化された専門性だから、専門外の人たちが参加するものとは結びつきにくいですね。

船戸:科学のジレンマですよね。アカデミックの基礎研究になればなるほど、一般の人には理解が難しくなってしまう。

小町谷:プロフェッショナルとアマチュアが集まると、どうなるか。 科学だけではなく、芸術も同じ問題をはらんでいます。そして、芸 術と科学の間にも課題がある。この二つを結びつけたときに、アー ティストとサイエンティストの連携において必ずしも良好な関係が 作れているとは限りません。

船戸:アートとサイエンスはそれぞれ目的とするところが違うけれど、プログラミングといった同じ技術を使っていたりします。そこではどちらも技術はゴールではなく、あくまでも道具。SIAFラボではテクノロジーだけでは解決できないこと・見えなかったことを、いろいろな背景を持った人たちが関わって解決・発想できるような場を構築していくことが大事なのだと思います。

石田: テクノロジーの源は欲望。それがないと技術は廃れます。 欲望の発露が、サイエンスかもしれないしアートかもしれない。

船戸:そういう意味で科学も芸術も何かしらの表現行為ですよね。

「つららはメディアである」に違和感なし

石田: 久保田晃弘先生(以下、久保田先生)がトークイベントの中で「あえてつららはメディアである、と言ってみる」という話をされました。僕自身は「つららはメディア」と言うとすごくリアリティを感じますが、一般の人からするとなんのことを言っているか理解できない部分が多いと思います。メディアという言葉は一般的にはマスメディアや記録メディアという意味で使われることが多いです。

でも本来のメディアの意味は、何かと何かをくっつける「媒介」を 表す動詞なのです。そう捉えると、SIAFラボが取り組んでいるツ ララボというプロジェクトの目的がしっくりくるのではないでしょう か?ツララボの一年目は、つららそのものにフォーカスしました。そ れはつららを氷として考えるということでもありました。その結果、 雪や氷の特性を研究している科学者の先生とつながることが出来 ました。そして二年目の2016年度はつららを単体としてではなく、 私達の住空間というもう少し視野を広げたシステムとして捉え、「建 築|をテーマにしました。その結果、一年前とは違う視点で語るこ とができる、建築環境の研究者や建築家と一緒に活動できました。 それはまた新しいスリリングな経験でした。で、また次ということに なると思うのですが、来年度は「都市」かな。つららを媒介に都市 を見る。そうすると、科学者でも建築家でもない、普通にまちに暮 らす人たちの話になってくるのではないかな。専門家的な視点で はない、本当に自分たちの周りにあるものとしてつららが見えてく るのではないかなと思います。八百万の神を信じた日本人は、も ともと様々なものを理解するというプロセスがあります。それはま さに媒介する行為としての「メディア」を感覚的に理解できること だと思うのです。

小町谷: 心身二元論、つまり体と心が別々に存在しているという概念から、メディアという考え方は発展したと思う。アニミズム的なもの、生命のないモノ(メディア)にも何かしら魂(コンテンツ)が宿っていると考えると、幅広くメディアを捉えられますね。

冨田: 久保田先生の「言ってみる」には、バイアスのかかった状態のメディアへの認識をフラットにする力がある。そこにあえて雪みたいな華やかなイメージではない「つらら」を投下したのはよかったと思う。いじり倒すことができるっていうのがメディアとしてのポテンシャルなんじゃないかと。とにかく結論を急がずに考え続けることが大事ですね。

サード・プレイスとしてのツララボ

冨田: ツララボというよりも、SIAF ラボ全体に言えることですが、 こういった取り組みは、サード・プレイスとしての側面があります。 ただ、専門性の高いアートやサイエンスの話ばかり聞いていると、

どこか提供する側とされる側とで、距離というか溝ができてしまっ て面白いコミュニティにはならない。やっぱり「言ってみる」とか「やっ てみる|みたいな実践の場も伴わないとダメだと思うんです。失 敗もたくさんありますが、それは無駄なものじゃなくて、なんていう かそのプロセスをひっくるめての価値だと思うんです。だからそう いう現実的とか効率的とかを考えて、やる前に諦めない。学校で も企業でもない。そういう場が一つぐらいあってもいいですよね。 今年の垂氷まつりは、「建築 | というテーマを設定したから、実際 に街なかの建物を見に行くことになって、結果的に札幌を再発見 することにつながった。自分たちの歴史や文化について、自らの 手で掘り起こしたものごとに人は愛着を持つ。そうすると、自分な りの言葉で語れるようになるし、いろいろと考えるようになる。札 幌を自分たちごととして考える第一歩になる機会であったり、実践 と学びの循環みたいなものができればいいなと。歩みは遅いでしょ うし、時間はかかると思いますが、お祭りである芸術祭とはちょっ と違うペースで進んでいくっていうのもいいと思う。

石田:建築環境の研究者が言うには、いまの技術では、つららをつくるほうが難しいらしい。つららができないように技術を発展させてきたから。つららのできる建物を考えることは、札幌らしい都市の在り方を探求していくことになるのではないでしょうか。

小町谷:人が生活するなかで出てくる現象としてのつららを対象にしたから、建築と結びついたのだけど、建築を眺めることで、札幌の近代化の歴史が見えてきました。厳寒で住まう、暖を取るところから発展した建物は、時代によって変化しました。現在は断熱効率の良い建築によって、つららは消えつつあります。その変遷を理解したうえで、資料館の裏庭に小屋を建てて、つららができやすい構造づくりに挑戦しました。とにかくいろいろ試しました。札幌らしい建築や都市の景観とは何かを考えていくと、つららの眺め方がまた変わるかもしれませんね。

船戸:いまは家の温度が均一化していて、寒い場所がないから、箱のみかんが腐ってしまう。また、昔は茶の間が一番暖かかったので、暖をとるためにも一家団欒の機会が多かった。家という機能を考えたときに温度が均一化されているということは本当にいいことなのかどうなのか…。つららを考えることは、生活を考えるきっかけになる。それは面白いと思いました。

小町谷: つららを通して生活を見る。それを共有できると興味深いプロジェクトになると思う。

冨田:面白いのは、僕ら自身が日常のなかでつららを気にし始めたこと。ツララボ以前には、あまりなかったことですよね。普段見慣れていて、平凡だと思っているもののなかにも、ちょっと視点を変えてみるとか、違う切り口で見てみると新鮮だったりするわけで、「見ること」の解像度をあげるってことと、そして、これはけっこう難しいんだけれど、食わず嫌いをしないで、怠けず自分の目でちゃんと見るというか、自分なりの「見出す目」を養うことが大事だよね。自発的な気づきを得られる場として、ツララボが機能するといい。そのためには他者の視点を知るってことも大事だし、いろいろな人が出入りできるような間口の広さと敷居の低さは必要かなと思います。



SIAF2014の出展作品で芸術祭の終了後も札幌市が 特別プログラム 所有することになった《一石を投じる》が札幌市資料館 《一石を投じる》のこれから の前庭に仮置きされています。この作品をこれからどう していくのがよいでしょうか?公共空間におけるアート、 -パブリックアートについて学ぶ-パブリックアートについて学びながら、さまざまな意見 が生まれた話題の作品《一石を投じる》の作者(美術家) 島袋道浩とゲストを交えた3回のトークセッションを市民 のみなさんと共有しながら、《一石を投じる》作品をこれ 企画・進行・プログラム発起人: 島袋 道浩 (美術家)、 からどうしようかと発起人の我々、ゲスト、参加されたみ 小田井 真美(さっぽろ天神山アートスタジオ AIR ディレクター)、 なさん、市役所担当者と悩み、考える。そのためにこれ 札幌国際芸術祭実行委員会 までの知識や価値観を更新すべく「そもそもパブリック・ プログラム・コーディネート、MC: 漆 崇博 (SIAFラボ マネージャー) アートとはどんな作品なのかしということについて学ぼう としたプログラムです。

「《一石を投じる》のこれから - パブリックアートについて学ぶ」のスタートに寄せて――発起人:小田井真美テキストより

まず、2014年7月に突如街の中に現れた《一石を投じる》が文字通り、 遭遇した人々に投げ込まれてさまざまな意見がわきあがりました。こ こから、広がる波紋をそのままにせず、このなりゆきをなぞりながら 時間の経過とともに議論を進めていきます。このプログラムでは、す べての回を動画で記録し、後日公開しています。また、すべての回で、 参加くださった方々で1回目は「アンケート形式」で、2回目、3回目は 「意見シート」として、任意/記述形式でご意見を提出いただきました。公開してもいいと申し出てくださったご意見は、特設ウェブサイトでお読みいただけます(※QR1、2)。トークセッションの記録、参加者からの意見をぜひご覧いただき、ご自身の考えやご提案を我々と共 有してください。

去る2016年3月27日(日)に美術家の島袋道浩さん(以下 島袋さん)、ゲストに村田真さん(以下 村田さん)をお迎えして「特別シンポジウム「なぜ石は資料館に置かれているのか~《一石を投じる》を巡って」(※ QR3)を開催しました。SIAF2014の出展作品《一石を投じる》が札幌市資料館前庭に置かれるに至った経緯を、これまで語られてこなかった興味深い当時のエピソードとともに島袋さんから直接聞く機会となりました。そして、ゲストの村田さんからはこれまでに世界各地で話題となったパブリックアート作品を取り巻く事実や反応などを交えて《一石を投じる》作品の位置づけや意義について触れていただく試みとなりました。

私自身は、《一石を投じる》作品はコンセプチュアルな作品であり、いま札幌市資料館にでんっと座っている石そのもののことを指すわけではないと受け止めています。ちらほらと耳にはいってくる意見や噂で言及されているような、つまりあの石がいくらだったのか、石の価値について議論するのはそもそもナンセンスだと考えています。そこで、《一石を投じる》という作品に込められたアーティストのメッセージ、またSIAF2014を通して作品としてパブリックに提示されたときの受け止め方や、作品を巡る議論の前提を整理して提示したいと考えていました。作品に興味を持っていただけましたら、ぜひこれまでの経緯を公開していますのでご一読、拝聴ください。

さて、今年度3回にわたって開催する「特別プログラム《一石を投じる》のこれからーパブリックアートについて学ぶー」は、3月27日までの経緯を受けてスタートしたいと思います。3月27日のシンポジウムの後半に、ゲストの村田さんと美術家の島袋さんの発言に興味深い内容がありましたので紹介します。

「アートには芸術的(美的)価値、市場価値、社会的価値の3つくらいの価値があります。90年代以降、阪神淡路大震災以降にそのアートが社会にどれだけ影響力を持ちうるか、アートは社会にとって役に立つのかという「社会的価値」にアーティストが気付き始めた。その頃から地域やコミュニティとコラボレーションする動きが盛んになってきています。しかしながら、最近はこの「社会的価値」の優先順位があ

がり芸術性がないがしろにされる傾向もあります。芸術性というのはなにかというと『人に対して影響を与えること』、つまり一石を投じることができるかどうかではないかと考えます。」というような村田さんのお話しを受け、「アートは鍼治療じゃないかと思っています、痛みがあったり強い刺激を伴ったりもする。だからアーティストは鍼灸師のようなものじゃないかと考えます。まちのマッサージ屋さんではないはずなんですが、この頃アートやアーティストが(気持ちのいいだけの)まちのマッサージ屋さん化しているような気がするということですね。」という内容を島袋さんが返されました。

最後に、島袋さんから「いま石が札幌市資料館に置かれているものをこれからどうするかを、みなさんの意見を聞きながらどうするか決めていきたいし、みなさんと時間をかけて話し合いながらも、単純な多数決じゃなくてアーティストの1票がどういう価値が持てるのかということも3回のプログラムを通じて考える場をつくりたい、これは『民主主義についてのワークショップ』ともいえるかもしれませんね。」という刺激的な呼びかけも起こりました。

《一石を投じる》札幌市資料館での展示解説

札幌国際芸術祭2014に出展された《一石を投じる》は、人工的で整然とした札幌の町並みに、でこぼことした自然そのものの巨石を持ってきて対比してみたいという島袋道浩の着想を実現した作品です。『北海道の誰もいかないような場所にある自然の石が札幌の街へやって来て、また元の場所へ戻っていく』という構想で、北海道で石の採れる場所を探す調査を繰り返し行いました。その中で平取町二風谷に沙流川上流から採れた『幸太郎石』という石があることを学び、その石を運ぶ賛同者との出会いがありました。そこで二風谷にある石を札幌市内に運び、芸術祭開催期間中に札幌市北3条広場に置いておくこととなりました。

島袋道浩の「作品」の特徴は、実際に目に見えているモノの部分だけではなく、そのモノが引き起こす場所や人との関係に焦点があてられていることです。《一石を投じる》もまた、札幌市北3条広場に置かれていた巨石そのものだけが作品ではありません。「都市の中に自然そのものの石が二風谷から運ばれて置かれている状況」に人々が遭遇し、それぞれの人々にそれぞれの考えを呼び起こさせていることが作品です。

芸術祭開催期間中に、多くの方に特別な思いや様々な考えを抱かせ続けてきた《一石を投じる》作品が芸術祭の記憶をとどめ、次回開催につなげる架け橋となることを願い、芸術祭終了後もそのまま札幌市中心部に継続して展示をすることになりました。新しい設置場所として札幌市と作家とで協議して決めた札幌市資料館の前庭は、都市と自然との対比ということでは赤レンガ庁舎前の北3条広場が持っていた意味と比較しても劣らず、次回の国際芸術祭の開催を市民の方々に思いめぐらしてもらうために、新たな一石を投じる場所となるでしょう。



RTI. トークセッションの動画記録



QR2: 参加された方々のご意見(公開の承 諾を頂いたコメントのみ)



特別シンポジウム「なぜ石は資料館に置かれているのか~《一石を投じる》を巡って|記録音声

第1回「公共空間のアートについて考える」

5月15日(日) 15:00 | 会場: 札幌市資料館 研修室 ゲスト: 青木 淳 (建築家)

- "パブリックアートは「その場所」と切り離せない。 なぜなら、状態を創りだすことだから"
- "否応無しに目の前に現れるのだから、 パブリックアートには常にウィットネス(証人)を創りだす"

《一石を投じる》作品が資料館に仮設置された経緯を作者の島袋さん本人と共に振り返えりました。1回目のゲストに建築家の青木淳さん(以下青木さん)を迎え、建築的観点から、公共空間に作品を設置する上で前提となる物理的条件や、場所と作品の関係性について、青木さんが手がけられた建築のケースの中で取り扱った「アート作品」の設置について多様な事例を紹介くださいました。島袋さんからも国内外のパブリックアートを数多く紹介いただき、0回目の村田さんとのトークでふれた「いまのパブリックアート」の姿を確認しながら、大きく拡張したパブリックアートについて話し合いました。

第2回「未来のパブリックアート」

7月24日(日) 18:00 (ラウンドテーブル)、20:00 (交流会) 会場: 札幌市資料館 研修室(ラウンドテーブル)、SIAF ラウンジ(交流会) ゲスト: 磯崎 道佳 (美術家)、高橋 喜代史 (アーティスト、一般社団法人 PROJECTA ディレクター)、豊嶋秀樹 (gm projects)

- "みんなのためと考えると、だれのためにもならないことがある。 だから、せめて自分が幸せになることをしよう"
- "レンズの焦点を絞りきると、突然またぱっと広がる"
- "完全なパブリックと完全なプライベートなんてないから、 この間のグラデーションのところでなにかできないか"
- "パブリックアートは「結果 | なんじゃないか"

3月にそもそもパブリックアートって?に始まり、5月には建築、都市設 計に入り込むリアリティある事例と考察、そして7月24日に、島袋さん と同世代40代の、アーティストとしてまた企画者としてアートプロジェ クトや展覧会を実施している3名のゲストを迎え、ディスカッションが 行われました。それぞれのこれまでの活動を紹介いただき、なぜ、い まここでパブリックアートなのか、企画者や実践者は「パブリック」を どう解釈し、作品を含めた態度、背景としてどのように捉えているの か、現在から未来の視点を踏まえてラウンドテーブル形式で話しまし た。2回目のディスカッションでは、作品が置かれる、出現するという 状況が、時間の経過とともに、時の背景つまり時代性が反映されて"パ ブリック"な存在、状況を創りだしていくのではないか、だからパブリッ クアートには「時間軸」の観点がいるという議論は興味深いものでし た。同時にアートの意味や価値もまた時代とともに変化することを思 うと、常に変わりゆくことを示唆し続けるのがアートなんじゃないか、 一見その場に居座り不変の象徴のように捉えられてしまう《一石を投 じる》が、とてつもなく長い時間の中で実は「変化」そのものだとしたら、 といまから遥か先の時間に思いを巡らす内容となりました。

第3回「古代のパブリックアート」

10月16日(日) 15:00 | 会場: 札幌市資料館 研修室 ゲスト: 中沢 新一(思想家、人類学者)

- "他者と関わった時点でパブリックアートだといえる"
- "近代は対立的に感じる、古代は「第三項」が置かれていて その状態は対立的ではない"

時間を経てプライベートがパブリックになっていく過程の必要性につ いて話し、なんだか希望の光のようにも思えた2回目を経て、思想家 の中沢新一さん(以下中沢さん)をお迎えした3回目「古代のパブリッ クアート では、島袋さん、中沢さん双方から 「石 | に纏わるさまざま な事象や人の捉え方、海外でみかけた石の風景、日本の風習や営み にある石の存在や風景について紹介されました。2回目とは逆に、こ こから過去にさかのぼりながら、我々自身の有り様にせまり、「古代 のパブリックアートは神と結びついている。アートはまつりと結びつ いている。まつりは神と結びついている。神は人を超えた存在のこと を指す。」と、1回目、2回目とはまた異なるレイヤーで、「一石を投じ るとは」、また「石とは」と別の角度から切り込んでいくお話を中沢さ んから聞くことができました。いつまででも聞いていられるような話 の展開でしたが、なぜ、この作品が(この石が)このように人々をざ わめかせる存在になったのか、その理由の一端を想像することがで きたかもしれません。それはまた、「パブリック」を別の視点で考察す ることにもなりました。

終わりに。

1回目には参加してくださった方々に「トーク前」「後半」の2回に分けてアンケートを配布し、参加した方の考え方の変化などを伺いました。

ここでは、『「一石を投じる」作品をどこに設置するのがふさわしいか』 という設問に対し、SIAF2014開催時の展示場所であった「赤プラ(札 幌市北3条赤レンガ広場)」という回答が多く見受けられた。その意 見に反応し、札幌国際芸術祭実行委員会は「赤プラ」での作品設置 の可能性を調べたところ、『①広場が計画されたときの有識者会議に よるコンセプトで、「駅前大通から赤レンガ庁舎に向かってその眺望 を確保すること(恒久設置物を置かない)」とあり、計画の重要な前 提条件でもあり変更することは難しい』 『②広場は条例により面積に よって決めれた利用料金が定められている。作品を設置することで 利用面積に変更がおこると利用料金にも変更が要されるため、変更 の手続きは難しい。』という回答が説明され、公共空間に作品を設置 するために交渉が必要な関係部署を説明する資料も提示されました。 2回目、3回目のトークではアンケートという方法をやめ、参加者は自 由に意見を書いて議論に参加できる、参加者の意見をより明確に残 すことのできる「市民の(個人の)意見」として提出いただくことに変 更しました。1回目の回答済みアンケートの集計、2回目3回目のご意 見は特設ウェブサイト(※QR2)で見ていただけます。

そもそも、美術作品を公共空間に設置するにあたり、このケースのように議論の場を設け、プロセスを積み重ねるということは稀なことのようですし、私はOPEN ENDの状態を好んでいることもありトークの回数を経るごとに、この議論はもう少し時間をかけて、というよりも時間の力を借りて、結果を先に設定すべきではないかと考えるようになりました。ここで終わらないほうがよいと。そこには、私もこの一連の学びを経てSIAF2014で発表された「一石を投じる」作品は、3年の時間を重ねることで名実ともにパブリックアートになりかけていると、その価値が備わったのではないかと思うようになったのです。なぜかというと、「芸術祭」がそもそも札幌の街の中に「一石を投じる」存在になっていたのではないかと、そうであるべきだと、「芸術祭」と「一石を投じる」作品をダブらせて考察するようにもなったためです。



第1回 「公共空間のアートについて考える」



第2回「未来のパブリックアート」



第3回「古代のパブリックアート」

連携企画



教育文化会館×SIAFラボ

ヤマガミユキヒロ「Air Scapes」

2016年6月18日(土)-7月18日(月·祝) 10:00 会場:SIAFプロジェクトルーム

関連イベント

ラボの日: ヤマガミユキヒロ アーティストトーク 6月18日(土) 18:00 | 会場: SIAFプロジェクトルーム

SIAFラボ編集局:ラウンジトーク vol.2「風景画ってなんだ?」

7月18日(月・祝) 15:00 | 会場: SIAF ラウンジ ゲスト: ヤマガミユキヒロ(アーティスト)、大友 真志(写真家)

札幌市教育文化会館で開催された舞台「Traditional Trial~能、狂言プラス~」の関連展示として、映像を担当するアーティスト、ヤマガミユキヒロの展覧会「Air Scapes」を開催しました。



The second secon



文化庁メディア芸術祭 札幌展 「ココロ・つなぐ・キカイ」× SIAFラボ

Sonic Pi 講座—プログラミングで ライブをしよう!—

2016年9月22日(木・祝) ①13:00 ②15:30

会場:SIAFプロジェクトルーム

講師:小町谷 圭(メディアアーティスト、札幌大谷大学講師)、石田 勝也(VJ、札幌市立大学講師)、船戸 大輔(エンジニア)

サッポロファクトリーで行われた文化庁メディア芸術祭 札幌展「ココロ・つなぐ・キカイ」の連携企画としてSIAFラボで2015年から継続的に続けている「Sonic Pi」というサウンドプログラムを用いたワークショップを開催しました。



ラボの日

2015年に引き続き、特別なテーマやプログラムを設定せずに、年間を通じて芸術に関する知識を共有するレクチャーや、SIAF2017に関するアーティストを招いてトークイベントなどを開催しました。(*はSIAF2017連携企画として開催)

2016年

緊急ミーティング 一緒に考えよう芸術祭プログラム! *

6月17日(金) SIAF2017期間中に札幌市内で行われる展覧会やイベントをサポートする「一緒 17:30 につくろう芸術祭 公募プロジェクト」開催ということで、バンドメンバー細川麻沙 美さん、木野哲也さんを中心に疑問質問にお答えするミーティングを実施。多く

の応募希望者の質問が飛び交いました。

6月18日(月·祝) ヤマガミユキヒロ アーティストトーク 15:00

7月16日(土)

祭りってなんだ?

音楽家であり、神楽・伝承音楽研究家の三上敏視さんをお招きし、「祭り」がもつ本質的な意味や楽しさ、そして信仰のための「祭り」がどのように変化していったのかなど、「芸術祭ってなんだ?」というSIAF2017の開催テーマを掘り下げました。

10月22日(土) 16:00

『OPEN GATE 2016』~動き続ける展覧会~報告会 *

Asian Sounds Research プロジェクトディレクターでありOPEN GATE キュレーターの Sachiko M さんがあいちトリエンナーレ2016のプログラムとして、愛知県岡崎市のデパート屋上で開催された「OPEN GATE 2016」の報告会を開催。マレーシア、カンボジア、日本の美術家や音楽家、写真家が参加し、屋上という特殊空間で5日間にわたって繰り広げられた、展覧会とも音楽ライブとも名づけ得ない新しい試みを映像を交えながら話していただきました。

11月17日(木) 18:30

スペシャルトーク『KENPOKU ART 2016 茨城県北芸術祭』を知る!

茨城県北芸術祭キュレーターの四方幸子さんにより本芸術祭を紹介するトークを 開催。芸術祭の概要、展示作品やイベントを現場に関わった者ならではのエピソー ドとともに紹介することで、本芸術祭の特徴が浮き彫りになり、来場者が伸び熱 気を帯びている県北の状況を伝えるトークとなりました。

2017年

しりょうかん大風呂敷出張工場 in SIAFラボ*

1月15日(日) 2月26日(日) 13:00 SIAF2017の大風呂敷プロジェクトが資料館へ出張。お気に入りの布を見つけてJRコンコースに設置する布を作成します。初めての方から、常連さんまで多くの方に参加して頂きました。

3月11日(土) 15:00

AFTER AIR: 竹内公太/アーツ・カタリスト滞在制作報告会

札幌のアーティスト・イン・レジデンスの団体・S-AIRと、科学と芸術をテーマに活動している美術団体・アーツカタリスト(イギリス)の交換プログラムの一環として、アーティストの竹内公太さんがイギリスで滞在制作を行いました。滞在中のリサーチや展示について SIAF ラウンジで報告会を行いました。

3月26日(日)

指輪ホテルと市電にゆられて演劇をつくろう参加者募集説明会*

SIAF2017にて行われる市電プロジェクト×指輪ホテルの参加者募集の為に説明会を行いました。芸術監督の羊屋白玉さんをお招きし、過去の他芸術祭で行った公演映像から最新作まで。その後、参加者からの質問などに答えて実際にどんな公演ができるかなどをディスカッションしました。



一緒に考えよう芸術祭プログラム



『OPEN GATE 2016』~動き続ける展覧会~報告会



『KENPOKU ART 2016 茨城県北芸術祭』を知る



しりょうかん大風呂敷出張工場 in SIAFラオ



竹内公太/アーツ・カタリスト滞在制作報告会

アートカフェ in 資料館



アートの理解を深めるため、作品のひとつのテーマについてみんなで話し合う場をつくろう!という趣旨で、SIAF2014ボランティアを中心に始まった市民による自主的なイベントです。毎回話し合うテーマを提案した人が店長となり、もちよった軽食を楽しみながら、アーティストやアートの専門家に限らず、アートに興味のある方なら誰でも交流できる場です。2015年度以降はSIAFの拠点である札幌市資料館で活動を続け、2016年度は5回開催しました。

2016年 4月17日(日)16:00 vol.18「おかんアート」

6月19日(日)16:00 vol.19「札幌の演劇について語ろう!」

8月21日(日)16:00 vol.20 「手に取る宇宙 - 松井紫朗との関係ツアー-|

9月25日(日)16:00 vol.21 「カザフ刺繍にみる遊牧文化と民間芸術 |

12月11日(日)16:00 vol.22「どうやってアート、見てますか?」

ラボ通信



2015年から不定期で発行している SIAF ラボの活動やアートに関する記事を掲載しているかわら版です。 2016年はラボ通信 vol.3を発行しました。

○ ラボ通信 vol.3

- アーティストインタビュー「大友良英×札幌」
- ・大風呂敷制作チーム座談会「大風呂敷を広げよう」
- ・SIAFラボ編集局編集会議「札幌の色ってどんな色?」
- 北海道コラム「なしてか読まさる」

SIAF2017連携企画



デザインプロジェクト



さっぽろコレクティブ・オーケストラ



ボランティアプロジェクト

SIAF ラウンジや SIAF プロジェクトルームを活用し、SIAF2017公式プログラムと連携して下記プログラムを開催しました。(*はラボの日として開催)

○ デザインプロジェクト

2016年 5月21日(土)13:00「まち歩きプロジェクトワークショップ」 6月8日(木) 17:00「第3回 デザインミーティング」 10月1日(土) 15:00「SIAFラボ プロジェクトミーティング」

○公募プロジェクト

2016年 6月17日(金)17:30「緊急ミーティング 一緒に考えよう芸術祭プログラム!」* 7月20日(水)-24日(日)16:00「公募 一次審査通過事業公開、意見募集 |

○ OPENGATE

2016年 10月22日(土)16:00 Asian Sounds Research Presents「OPEN GATE 2016」 ~動き続ける展覧会~報告会 *

○500メーターズ

2016年 11月11日(金)18:30・12日(土)15:00「SIAF500メーターズ募集説明会」

○ 大風呂敷プロジェクト

2016年 11月23日(水・祝)「布回収ボックス設置」

2017年 1月15日(日)13:00「しりょうかん大風呂敷出張工場 in SIAFラボ」* 2月26日(日)13:00「しりょうかん大風呂敷出張工場 in SIAFラボ」*

○ さっぽろコレクティブ・オーケストラ

2016年 12月3日(土)15:00「オーケストラってなんだ?~さっぽろコレクティブ・オーケストラ にむけて~ |

○ ボランティアプロジェクト

2017年 2月28日(火)18:30「第3回ボランティアミーティング」

○ 市雷プロジェク

2017年 3月26日(日)15:00「指輪ホテルと市電に揺られて演劇をつくろう参加者募集説明会」*

SIAFラボ イベント年表

2016年

4月17日(日) 16:00 | SIAF ラウンジ 連携イベント アートカフェ in 資料館 vol.18 「おかんアート」

4月30日(土) 15:00 | SIAF ラウンジ Bent Icicle Project-Tulala-ツララボ 第1回ミーティング

5月7日(土) 15:00 | SIAFラウンジ

Bent Icicle Project-Tulala-ツララボ 第2回ミーティング

5月15日(日) 15:00 | 札幌市資料館 研修室 (一石を投じる) のこれから 第1回「公共空間について考える」 ゲスト: 青木淳(建築家)

5月21日(土) 15:00 | SIAFプロジェクトルーム SIAFラボ編集局 第1回編集会議「一サッポロを編集するー」 ゲスト: 佐藤 直樹(アートディレクター、SIAF2017パンドメンバー)、

6月4日(土) 15:00 | SIAFラウンジ

Bent Icicle Project-Tulala-ツララボ 第3回ミーティング

坂口 千秋(コーディネーター、SIAF2017バンドメンバー)

6月17日(日) 17:30 | SIAFラウンジ ラボの日「緊急ミーティング 一緒に考えよう芸術祭プログラム」 ナビゲーター: 漆 崇博、木野 哲也、細川 麻沙美(SIAF2017バンド

6月18日(土)-7月18日(月・祝) 10:00 | SIAF プロジェクトルーム 連携企画 教育文化会館×SIAFラボ ヤマガミユキヒロ 「Air Scapes |

6月18日(土) 18:00 | SIAFプロジェクトルーム ラボの日 ヤマガミユキヒロアーティストトーク

6月19日(日) 16:00 | SIAFラウンジ

連携イベント アートカフェ in 資料館 vol.19 「札幌の演劇について語ろう! |

6月25日(土) 15:00 | SIAFラウンジ

SIAFラボ編集局 ラウンジトーク vol.1「メディアってなんだ?」 ゲスト: 久保田 晃弘(多摩美術大学教授、アーティスト)

6月26日(日) 15:00 | SIAFプロジェクトルーム SIAFラボ編集局 第2回編集会議「一〇〇を編集する一」

7月2日(土) 15:00 | SIAFラウンジ

Bent Icicle Project-Tulala-ツララボ 第4回ミーティング

7月16日(土) 16:00 | SIAFラウンジ ラボの日「祭りってなんだ?」

プポの日 「奈りつ Cなんだ!」 ゲスト:三上 敏視(音楽家、神楽・伝承音楽研究)

7月18日(月・祝) 15:00 | SIAFラウンジ SIAFラボ編集局 ラウンジトーク vol.2 「風景画ってなんだ?」 ゲスト: ヤマガミユキヒロ(アーティスト)、大友 真志(写真家)

7月23日(土) 15:00 | SIAFプロジェクトルーム SIAFラボ編集局 第3回編集会議「一札幌にはなにがある?-」

7月24日(日) 18:00 | 札幌市資料館 研修室 (一石を投じる) のこれから 第2回「未来のパブリックアート」 ゲスト: 磯崎 道佳(美術家)、高橋 喜代史(アーティスト、一般社団 法人PROJECTA ディレクター)、豊嶋 秀樹(gm projects)

8月6日(土) 15:00 | SIAFラウンジ Bent Icicle Project-Tulala-ツララボ 第5回ミーティング

| Deficiological Tulada 777% %3ELC 7477

8月20日(土) 15:00 | SIAFプロジェクトルーム SIAFラボ編集局 第4回編集会議「-どのように発信する?-」

8月21日(日) 16:00 | SIAFラウンジ

連携イベント アートカフェin 資料館 vol.20「手に取る宇宙ー 松井紫朗との関係ツアー-」 8月27日(土)・28日(日)

さっぽろ垂氷まつり in summer

 *8月27日(土)・28日(日) 10:00 | SIAFラウンジ 「ツララボ HP はじめました!」「Mikoshi Go!」 「人工氷柱製造装置 2016夏」

・8月27日(土) 10:00/13:00・ 28日(日) 10:00/13:00/18:00 | SIAFラウンジ 「つららアクセサリーをつくろう!」

9月3日(土) 15:00 | SIAFラウンジ Bent Icicle Project-Tulala-ツララボ 第6回ミーティング

9月17日(土) 15:00 | SIAFラウンジ

SIAFラボ編集局 ラウンジトークvol.3「リアリティってなんだ?」 ゲスト:藤木 淳(メディアアーティスト、科学技術振興機構さきがけ 研究者)、小町谷圭(メディアアーティスト、札幌大谷大学講師)

9月22日(木・祝) 13:00/15:30 | SIAF プロジェクトルーム 連携企画 文化庁メディア芸術祭 札幌展「ココロ・つなぐ・キ カイ」×SIAFラボ「Sonic Pi 講座-プログラミングでライブ をしよう!-」

講師:小町谷 圭(メディアアーティスト、札幌大谷大学講師)、 石田 勝也(VJ、札幌市立大学講師)、船戸 大輔(エンジニア)

9月24日(土) 15:00 | SIAF プロジェクトルーム SIAF ラボ編集局 第5回編集会議「-情報を編集しよう-」

9月24日(土) 17:00 | SIAF ラウンジ Bent Icicle Project-Tulala-ツララボ 第7回ミーティング

9月25日(日) 16:00 | SIAF ラウンジ 連携イベント アートカフェ in 資料館 vol.21 「カザフ刺繍に見

る遊牧文化と民間芸術し

10月1日(±) 15:00 | SIAFプロジェクトルーム SIAFラボ プロジェクトミーティング

ゲスト: 工藤 "ワビ" 良平(アートディレクター、グラフィックデザイナー)、佐藤 直樹(アートディレクター、SIAF2017パンドメンバー)

10月16日(日) 15:00 | 札幌市資料館 研修室 (一石を投じる) のこれから 第3回「古代のパブリックアート」 ゲスト: 中沢 新一(思想家、人類学者)

10月22日(土) 16:00 | SIAFプロジェクトルーム ラボの日「OPEN GATE 2016」〜動き続ける展覧会〜報告会 ゲスト: Sachiko M(Asian Sounds Research プロジェクトディレ クター、OPEN GATE キュレーター)

11月5日(土) 15:00 | SIAF ラウンジ

Rent Icicle Project - Tulala - ツララボ 第8回ミーティング

11月17日(木) 18:00 | SIAFラウンジ ラボの日『KFNPOKU ART 2016 茨城県北芸術祭』を知る!

ゲスト: 四方 幸子 (茨城県北芸術祭キュレーター) 11月19日(+) 15:00 | SIAF プロジェクトルーム

| 11月19日(土) 15:00 | SIAF プロジェクトルーム | SIAFラボ編集局 第6回編集会議「-発信方法を考える-」

12月3日(土) 15:00 | SIAF ラウンジ Bent Icicle Project - Tulala - ツララボ 第9回ミーティング

12月10日(土) 15:00 | SIAFプロジェクトルーム SIAFラボ編集局 第7回編集会議 [-続:発信方法を考える-|

12月11日(日) 16:00 | SIAFラウンジ 連携イベント アートカフェ in 資料館 vol.22 「どうやってアート、 見てますか?」

2017年

1月7日(土) 15:00 | SIAFラウンジ
Bent Icicle Project-Tulala-ツララボ 第9回ミーティング

1月15日(日) 13:00 | SIAFプロジェクトルーム ラボの日「しりょうかん大風呂敷出張工場 in SIAFラボ |

1月28日(土) 15:00 | SIAF プロジェクトルーム SIAF ラボ編集局 第8回編集会議 [-記事をつくろう-

1月29日(日)-2月5日(日)

| | さっぽろ垂氷まつり2017 プレイベント「つらら建築ハッカソン」

レクチャー…1月29日(日) 15:00 | SIAFラウンジ 制作…1月29日(日)-2月5日(日) | 裏庭特設会場、SIAFプロ ジェクトルーム

表彰式…2月5日(日) | SIAFラウンジ

2月6日(月)-12日(日) さっぽろ垂氷まつり2017

「大人気!つららアクセサリー」

・2月11日(土・祝)-12日(日) 15:00 | 札幌市資料館 研修室 「SIAFラボ編集局 デジタル壁マガジン」

2月18日(土) 15:00 | SIAFラウンジ SIAFラボ編集局 ラウンジトークvol.4「ハルニレと札幌の町」 ゲスト: 笠 康三郎(ランドスケープアーキテクト、札幌ハルニレプロ

2月25日(土) 15:00 | SIAFプロジェクトルーム SIAFラボ編集局 第9回編集会議「-壁新聞をつくろう-」

2月26日(日) 13:00 | SIAFプロジェクトルーム ラボの日「しりょうかん大風呂敷出張工場 in SIAF ラボ |

3月4日(土) 15:00 | SIAF ラウンジ Bent Icicle Project-Tulala-ツララボ 第11回ミーティング

| 3月11日(土) 15:00 | SIAF プロジェクトルーム | ラボの日「AFTER AIR: 竹内公太 / アーツ・カタリスト滞在 | 制作報告会 |

ゲスト: 竹内 公太(アーティスト)

3月25日(土) 15:00 | SIAFラウンジ 2016年度 SIAFラボ年度末報告会 ゲスト: 久保田 晃弘(多摩美術大学教授、アーティスト)

3月26日(日) 15:00 | SIAFラウンジラボの日「指輪ホテルと市電にゆられて演劇をつくろう参加者募集説明会 |

ゲスト: 羊屋白玉(指輪ホテル 芸術監督)

おわりに

1年目のSIAFラボの取り組みは、私たちが暮らす札幌・北海道を捉え直す機会と場を 提供することを使命として「思考と体験の場」を創出することでした。

その場を土台として、2年目のSIAFラボの取り組みには、「試す」という行為が組み込まれたと実感しています。

つまり、活動の参加者が受動的な関わりではなく、自らの意思で能動的、自発的に物事 を考え、試すというプロセスが各プログラムの中で随所に見受けられました。

それは、プログラムを企画する側からの投げかけ、問いかけに対して、その意図や導きによってもたらされる場合も含め、それぞれの参加者が答える意思を持ち、時に発言であったり、時に制作物であったり、時に自主的な行動として、「何かを試す場」として機能した結果であり、1年目とはまた違う風景が立ち上がってきたと認識しています。

同時に、SIAFラボの取り組みも3年目として、これまでに参加いただいている方々の熱意を原動力に、大きく飛躍していくことを目指していきます。

本誌の発行に際しては、ご協力いただいた関係者の皆様に感謝申し上げるとともに、 本書を通じてSIAFラボ及び札幌国際芸術祭の活動の意義を共有する機会となること を願っています。

編集:SIAFラボ

漆 崇博/石田 勝也/小町谷 圭/斎藤 ふみ/ 船戸 大輔/冨田 哲司/細川 麻沙美 川成 由/杉本 直貴/詫間 のり子

協力: ツララボプロジェクトメンバー SIAFラボ編集会議メンバー

編集協力(P7-8、P11-12):一條 亜紀枝(コピーライター)

デザイン: 白井 宏昭

発行: 札幌国際芸術祭実行委員会事務局

助成: 平成29年度 文化庁 文化芸術創造活用 プラットフォーム形成事業